

5 斑点米カメムシ類の薬剤防除法

ねらいと成果

1999年度産米において斑点米が検査等級格落ちの最大要因となり、防除対策の確立が緊急の課題となったため、カメムシ類が多発しやすい早期イネを対象に、薬剤の2回散布による斑点米の発生防止効果について検討した。その結果、出穂8日後及び16日後に散布すると、斑点米の発生を無散布の5分の1以下に抑えられ、最も効果が高いこと、及び、カスミカメムシ類に起因するカスミ斑点米(図)に対しては出穂8日後、それ以外のカメムシ類に起因する標準斑点米(図)に対しては出穂16日後散布の効果が高いことが判明した。

内容

1 試験方法

- (1) 散布方法：氷上郡青垣町において「コシヒカリ」(5月3日田植。7月24~25日出穂)を対象に、薬剤の散布月日を8月2日(出穂8日後)、10日(出穂16日後)、17日(出穂23日後)とし、その組み合わせにより、2回散布区を1薬剤当たり3区設置した。供試した薬剤は表に示す3剤で、いずれもナイアガラホースを使用して4kg/10aを散布した。
- (2) 調査方法：8月31日に畦畔より5m離れた場所より100株を選び、1株について2穂ずつ、

計200穂を抜き取り、自然乾燥させた。その後、9月12日に脱穀、籾すりし、1.8mm以上の粒厚の玄米について斑点米数をカスミ斑点米と標準斑点米(図)に分けて調査した。

2 試験結果

無散布区の斑点米混入率が0.71%であったのに対し、シラフルオフエン粉剤DL、イミダクロプリド粉剤DL、エトフェンプロックス粉剤DLの2回散布区ではそれぞれ0.13~0.22%、0.13~0.24%、0.09~0.20%となり、いずれも無散布区の3分の1以下に抑えられた。散布時期による効果の差についてみると、3薬剤とも出穂8日後、16日後に散布した区の斑点米混入率が最も低く、この時期の散布が最も効果が高いと考えられた。次にカスミ斑点米、標準斑点米についてみると、カスミ斑点米では出穂8日後、標準斑点米では出穂16日後の薬剤散布が含まれている区の混入率が低かった。

普及上の注意事項

斑点米カメムシ類に対し、薬剤散布のみでは効果に限界があるため、増殖場所となるイネ科雑草を除去することにより、カメムシ密度のより一層の低下をはかる必要がある。

廣瀬 敏晴(農業技セ・病害虫防除部)



図 斑点米の症状

表 薬剤散布による斑点米防止効果

散布薬剤	散布月日			斑点米混入率(%)		
	8/2	8/10	8/17	標準	カスミ	合計
シラフルオフエン粉剤DL	○	○	-	0.05	0.08	0.13
//	-	○	○	0.03	0.19	0.22
//	○	-	○	0.07	0.06	0.13
イミダクロプリド粉剤DL	○	○	-	0.04	0.09	0.13
//	-	○	○	0.04	0.20	0.24
//	○	-	○	0.06	0.11	0.17
エトフェンプロックス粉剤DL	○	○	-	0.05	0.04	0.09
//	-	○	○	0.03	0.06	0.09
//	○	-	○	0.12	0.08	0.20
無散布	-			0.44	0.27	0.71